

# 事例3 三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興

文：環境省 自然環境局 国立公園課 浪花伸和

## 復興への願いを込めた国立公園

2013年5月、新しい国立公園が誕生した。「三陸復興国立公園」である。国立公園の名称に地名以外の文字が入ったことは、日本の国立公園指定80年の歴史上、初めてのことである。

環境省では、2011年3月に発生した東日本大震災からの復興に資するため、東北地方太平洋沿岸地域の自然公園等を活用した7つの取り組み、「グリーン復興プロジェクト」を実施している。その取り組みのひとつが「三陸復興国立公園」の創設である。この公園の名称には、復興に役立つ国立公園をとという強い願い、またこの地域が元来持つ自然のつながりを活かした復興（グリーン復興）の意味が込められている。今回はこのグリーン復興プロジェクトの中で、特徴的な取組である震災の記憶を後世に伝える取り組みと、東北海岸トレイル（みちのく潮風トレイル）の取り組みについて説明する。

## 震災の記憶の伝承（震災メモリアルパーク中の浜）

「自然は我々に大きな恩恵をもたらす一方で、時には脅威となる」。この自然の両面性を地域や公園利用者に伝えていくことは、三陸復興国立公園の重要な役割である。

岩手県宮古市の中の浜キャンプ場は、震災時、高さ14mの津波が来襲し、人命こそ失われなかったものの、キャンプ場の施設のほとんどが流失した。環境省では、この場所を自然の脅威を学び、それを後世に伝える場として、2014年5月、「震災メモリアルパーク中の浜」を整備した。ここでは、被災したキャンプ場の施設を遺構として保存すると



震災遺構を活用した「震災メモリアルパーク中の浜」  
参考；三陸復興国立公園ポータルサイト  
<http://www.env.go.jp/jishin/park-sanriku/>

ともに、津波の高さを体験できる丘を整備するなど、利用者が津波の脅威を体感できるよう工夫を行った。さらに、自らの被災体験やその後の復興の様子を人々に伝える、地域の「語り部ガイド」と連携することで、利用者の理解をより深めるとともに、地域の観光面での活性化にも貢献できるものと考えている。

## みちのく潮風トレイル

みちのく潮風トレイルは青森県八戸市から福島県相馬市を結ぶ全長700kmのロングトレイル（長距離自然歩道）である。三陸沿岸の自然豊かな地域を結ぶだけでなく、利用者や地域の人々との交流を産むことにより、地域活性化を目指している。2015年1月現在、八戸市～岩手県久慈市までの約100km、福島県相馬市～新地町までの約50kmが開通しており、順次、路線の検討、地権者との調整、マップの作成等を行い、開通を進めている。

全国には既に9つの長距離自然歩道が設定されているが、歩道の補修、道標の改修といったきめ細かい管理、地域での観光等への活用や、利用情報の発信などについて不十分な部



地域住民とのワークショップの様子

分があり、地域住民の関心も比較的低いことが課題であった。また路線には民有地も多く含まれ、路線と使用されることへの理解や路線の維持管理に地域住民からの支援と協力による協働管理が不可欠である。これらの課題を解決するため、みちのく潮風トレイルでは路線決定の段階から地域住民が参加したワークショップと現地調査を行い、合意形成を図るとともに、トレイルの管理・運営への地域住民の参加を積極的に呼びかけることとした。路線決定からその活用まで地域住民が楽しみながら参加することで、「自分たちの道」としての意識が芽生え、路線決定後の管理・運営への積極的な参加が期待される。

現在開通している八戸市～久慈市間では、トレイル利用者への案内や地域の解説、路線の管理などが地域住民の手で行われており、当コースを歩いた際には、地域の方々からのおもてなしを受けるだろう。三陸沿岸の風光明媚な自然に癒やされながら、地域の文化や人との出会いも楽しんでいただきたい。